

ミュージアムは土地の記憶に向き合う装置です。

土地の記憶を調べ、伝えるモノを集め、收藏し、

土地の記憶を語り合い、学び合う場をつくります。

しかし、そのような活動は

ミュージアムに限ったことではありません。

本フォーラムでは、NPO法人による土地の記憶の再生、

記念館における土地の記憶の次世代への継承、

土地の記憶を探りながら地域の文化を創っている芸術活動という

三つの事例を講師からお聞きし、

ミュージアム的な機能の多様な展開に学びながら、

土地の記憶に向き合うことが何を生み出すのかを考えました。



日時：2021年1月24日（日）13：30～15：30

会場：福島県立博物館講堂

講師：吉岡宏高さん（NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団理事長）

山下美晴さん（舞鶴引揚記念館長）

岩名泰岳さん（画家・〈蜜ノ木〉主宰）

モデレーター：川延安直（福島県立博物館副館長／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

※講師3名はオンラインでの参加。参加者は来場による参加のほか、オンラインでもご参加いただきました。

吉岡宏高

北海道三笠市出身。福島大学卒業後、製糖会社・シンクタンク勤務を経てまちづくりコーディネーターとして独立。

2004～2019年、札幌国際大学観光学部で教壇に立つ。

1999年から空知産炭地域で「負の遺産」と捉えられてきた炭鉱遺産をもとにした地域活動を実践し、

2007年にNPO法人炭鉱の記憶推進事業団設立。炭鉱遺産でのアートプロジェクトなどを展開してきた。

2018年、夕張市石炭博物館の指定管理を受託し館長に就任。日本遺産〈炭鉄港〉の仕掛人でもある。

山下美晴

京都府舞鶴市出身。2012年、直営になった舞鶴引揚記念館の初代館長に就任し現在に至る。

同記念館の資料をユネスコの「世界記憶遺産」とする活動をけん引。2015年の認定に導いた。

開館30周年を迎えた2018年、展示や施設のリニューアルも実現。NPO法人「舞鶴・引揚語りの会」との協働により、

引き揚げの記憶を次世代に継承する場を生み出している。

岩名泰岳

三重県伊賀市出身。成安造形大学卒業後、ドイツのデュッセルドルフ芸術アカデミーで絵画を学ぶ。

2011年の東日本大震災をきっかけに、故郷で地域に関わりながらの芸術活動を志す。

帰郷後、同世代の人々と〈蜜ノ木〉を立ち上げる。

地域の歴史を学び、その成果を紹介する展覧会を企画したり、

地域の伝統行事に参加するなど、ゆるやかな連帯の中で土地に息づく活動を続けている。

地の記憶を苗床に

空知・島ヶ原・舞鶴に学ぶ「ミュージアム的」なこと

事務局・小林めぐみ

今日は博物館に来ていただきましてありがとうございます。今日司会をさせていただきます。ライフミュージアムネットワーク事務局で、県立博物館学芸員の小林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日開催いたしますライフミュージアムネットワークのフォーラム「地の記憶を苗床に」は、ライフミュージアムネットワークの今年度の最後の事業になります。少しだけライフミュージアムネットワークの説明をさせていただきます。この事業は2011年、東日本大震災のあとに、私たちが学んだ「いのち」の大切さや「くらし」の大切さについて、あらためて福島を歴史や今に学びながら、みなさんと考えていく場をつくっていききたい。博物館としてできる役割を、ミュージアムや他の方々とのネットワークのなかで実現していきたいと思ひまして事業を進めてきたものです。今年度3年目になっています。

本日は、その集大成のフォーラムとして企画しました。3人の講師の方をお招きし、本来でしたらここに3人の方に来ていただいております。ただ、コロナウィルスの感染状況の悪化に伴いまして、今日は残念ですがオンラインで出演いただくというかたちになりました。併せまして、参加者のみなさまも、それぞれの状況により、オンラインと来場といずれかを選んでいただいております。

では、あらためまして講師の3人をご紹介したいと思います。今日のこの「地の記憶を苗床に」空知・島ヶ原・舞鶴に学ぶ「ミュージアムの」なこと」は、今年度「いのち」と「くらし」をミュー

ジウムとして考え、みなさんと場をつくっていくための先進事例としてライフミュージアムネットワークが学びに行った地域、それから、これまで勉強させていただいた地域から講師として来ていただいて、参加者のみなさんと、三つのエリアでなされていることを勉強して、では福島はどうしようかということもディスカッションしていければと思ひて企画したものです。

では、講師の第一人目、北海道の空知地方から、NPO法人炭鉱（ヤマ）の記憶推進事業団理事長で、夕張の石炭博物館の館長でもいらっしゃいます吉岡宏高さん。吉岡さん、どうぞよろしく願ひいたします。

吉岡宏高
よろしく願ひします。

小林

続きまして、京都からご参加いただいております。京都の日本海側に位置します舞鶴の引揚記念館の館長をしていらっしゃいます山下さん。山下さん、どうぞよろしく願ひいたします。

山下美晴
どうぞよろしく願ひします。

小林

そして、3人目。三重県の島ヶ原という地区で、「蜜ノ木」というグループを作り、地域のことを学んだり表現したりという活動をしていらっしゃいます、「蜜ノ木」主宰で画家の岩名泰岳さん。岩名さん、どうぞよろしく願ひいたします。



吉岡宏高さん

す。

岩名泰岳
こんにちは、岩名です。

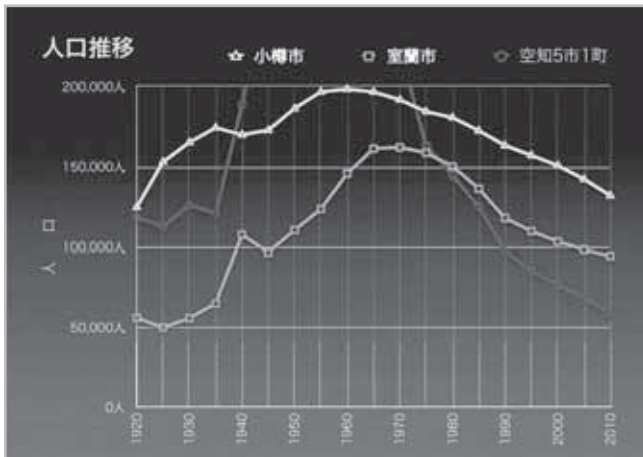
小林

それでは、早速、みなさんのお話を順にお聞きしてまいります。最初は、北海道から吉岡宏高さんにお聞きいたします。吉岡さん、どうぞよろしく願ひいたします。

空知産炭地域

吉岡

北海道空知産炭地域で、炭鉱遺産をもとにした地域の活性化を行っている吉岡といいます。



がここにある」というコンセプトが、実践的に得られました。

炭鉱ができたために
街が成立したのに

毎年10mも雪が降って、本来だと人が住みそうもないような場所に人が集まって、あれだけ大きな都市ができた。それが、石炭産業がなくなった後に、どのような地域スローガンが掲げられたかというところ、炭鉱の暗い過去を払拭する「でした。炭鉱は暗いから、その痕跡を消し去らなければというものです。

これに対して私は、まず第一に「ただ暗いだけなのか？」ということを感じました。第二に、「炭鉱ができたために街が成立したのに、それをなかったことにすると、もう全く履歴の詐称ではないか？」ということ。北海道は、そもそも街があった所に炭鉱ができた常磐炭田とは違うのです。

そして第三に、「一体全体、何を实际にしましたのか？」ということ。私は、夕張市石炭博物館の館長でもありますが、そもそもこのミュージアムは「石炭の歴史村」という遊園地とセットで運営されていました。博物館の30mほど上流にあった遊園地は、今や遊具は撤去され、また朽ち果て、残骸だけが残っています。

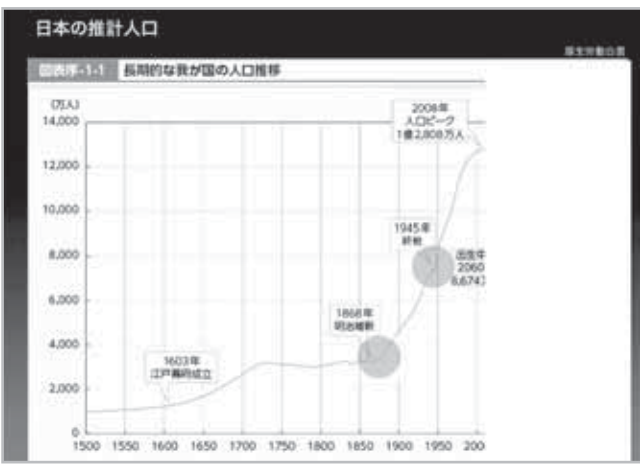
空知全体には、1970～1990年の短期間に、国からの補助金が1500億円ぐらい投入されてきましたが、もう一つとして残っていない。このうち0.01%でも残っていれば、我々の活動を1000年は続けていけるのですが、何も残っていません。



すでに起きた未来がここにある

夕張というのは、空知最大の炭鉱都市で、最盛期1960年の人口は12万人。その時の札幌は約60万人ですから、札幌対夕張の比率は4対1くらいでした。現在は札幌190万人、夕張は8000人を切っており、もう比率は無限大のようなものです。

夕張の中心商店街である本町も、1980年代は人口5万人で炭鉱も操業しており、斜陽と言われながらもまだ賑わいが感じられました。それが1990年代に入り炭鉱がなくなると一気に淋しくなり、2000年代には観光政策の一環で拡張事業が行われ家並みは新しくなりま





どうしてこのような事態が起こってしまったのか。一つは、自分たちの街の価値とか歴史を知らない、主体性がないことが、こういう悲劇をもたらす。

二つめは、自分たちの未来を主体的に考えられない。どこか外のコンサルが言ったり、国が言ったりした通りのことをやってきた。そして三つめとして、地域を変えてみようと思わない。黙っていても国からお金が降りて来た訳ですから、そのうちに麻薬中毒になってしまった。

私は、空知の炭鉱出身者として、この地域が日本を支えてきて北海道を築いてきたという思いがありました。それはどうして形成されたのかというと、小さいころから職住一体という炭鉱街に住む中で、父や周りの人から炭鉱の歴史や巨大なシステムについての知識を得ることができたからだと思っています。

歩くことからスタートしました

今から22年前に、まだ多少は残ってるんだから、みんなを誘って探してみようよということで、歩くことからスタートしました。例えば、先ほどの選炭機の奥には、炭鉱が閉山するときに産業廃棄物が不法投棄された、人の背丈まで草が生い茂った場所がありました。ここがまさに1879年（明治12年）に北海道初の近代炭鉱ができた場所でした。歩いてみようよということからスタートしてるうちに、元炭鉱マンだとかいろんな人が手弁当で片付けや草刈りなど整備し始めて、今は行政によるジオパークの施設として快適に歩けるようになっていきます。

だいたいの屋外の散策型施設というのは、せっかく公共で整備しても誰も来ないうちにどんどん

ん朽ちていくっていうパターンが多いのですが、この場合は我々が総工費3万円ぐらいで最初から公園というコンセプトを持ちながら作っており、後追いで行政が公共工事として場所を整備した時には、すでに人が来るような場所になっているんです。

しかし、いくら我々市民が一生懸命活動しても、地域のトップにある市長・町長が、相変わらず炭鉱は暗いという考え方だと、活動は疲弊してしまいます。やっぱりここは頂上攻略でもしなきゃ駄目だろうと、2005年に我々民間団体が管内の市長を全員呼んでフォーラムをやりました。この地域は、炭鉱遺産というものが残っているんだから、それに活路を見い出していこうじゃないかっていうもので、次に北海道庁の力を借りて地域のマスタープランみたいな計画を作り・・・と、次から次へと策を練り出していきました。

アートの力

実際には、炭鉱遺産は広く知られていませんし、やはり裾野を広げないと、こういう運動というのは力を得ることはできません。とにかく炭鉱遺産の現場に来てさえくれば、これだけの圧倒的な迫力と、そして100年の間に絶頂と没落を経験したダイナミックさは、必ず人々の心を打つという自信はありました。しかし、その現場へ来てもらうのに、どういうきっかけを作っていったらいいんだろうかと考えあぐねていた時に、着目したのがアートの力です。

そこで、札幌市立大学デザイン学部の上遠野さんと、これまで二人三脚で、炭鉱遺産の現場でアートをやってきました。例えば2014年

力を、上遠野さんと一緒にやる中で実感することができました。

そして、アート好きの裾野は広いですから、ちょっと関心を持ってもらうとそれなりの人数になる。そしてとにかく現場に来てもらう。最初はみなさんアートを見に来るのですが、アートはどうでもよくなって、「いやあ、炭鉱ってすごいね」って言って帰ってゆく。展示してある作品自体が、現場に即し現場で考えてもらうようなものばかりですから、見に来てくれた人も、それぞれに触発されるものがあるようです。アート以外にも、鉄道であったり環境教育であつたり関心の入り口は他にもいろいろあります。

対話の場

すが、アートは我々の活動を盛り上げる大きな力になってきました。

もう一つ、今取り組んでいるのは、ミュージアムです。先日、地元の小学生がやって来て、元炭鉱マンの西田という博物館スタッフが探炭機械の実演運転と解説を行いました。坑内で巨大な探炭機械を実際に使って石炭を掘っていた人が、子どもたちに現物の機械を使ってこういうふう掘っていたといった話を伝えていきます。ただ単に見せるだけのミュージアムじゃなくて、対話の場になっているのです。私も結構な頻度で、この探炭機械の実演運転の現場に立って話をします。私は坑内で働いたことはありませんが、炭鉱で育った人間として話をしています。そういったさまざまなことを、目の前にいる方の表情を見ながらお話ししていくと、我々もいろんなヒントが得られるのです。

あともう一つ、石炭博物館の大きな特徴だと思ふのが、実際に元炭鉱の坑道を展示の一部として見せていました。しかし残念ながら、2019年の4月に坑内火災が起きて、公開できない状況にあります。火はもう消え、消火のために入れた水も揚水されています。

私が小学校6年生の1975年にも、自分のいた幌内炭鉱で同じような経験をしました。地下750mでガス爆発が起き、坑内火災を消すために400万tの水を注水し、2年間かけて坑内に残っていた全遺体を収容して生産再開までたどり着いた。まさか親子2代で、坑道注水に関わるとは思ってもみませんでした。ですが、私がかつて自分のいた炭鉱で得た経験というの

は、活かされるものです。こういう時でも、めげずに、慌てずに、どしどしと腰を据えて、しっかりとやっていかなきゃならないというのは、やはりそこは炭鉱で育った人間の経験です。

形の见えないものを どうやって伝えていくのか

炭鉱遺産の表面的な格好良さとか、歴史のごさとかから、炭鉱に関心を持っていただけで結構なのです。しかし、やはりお伝えしたいのは、どういう時代になっても、先に向かっているような困難を乗り越えていくっていう、そういう力強さです。これが、まさに炭鉱の特質なんだと。そういうことを、どのようなかたちで知っていたか。形の见えないものをどうやって伝えていくのかといったときに、ある程度かたちの見えるものを入り口や頼りにしながら、見えざるものにとどろき着いてもらわなければならない。そこに、ミュージアムが一つ大きな役割を果たしていくのかなと思っております。

産業というのは、まさにネットワーク

北海道は、人口が100年で100倍になったという地域です。新千歳空港のある場所は、もともと坑内で使う坑木のための森林だったの、地権者は炭鉱会社だけでした。そのため、新空港の建設の時には、えらい早いスピードで完成させることができました。そういった、今に直結する歴史性があります。

現在は、そういった歴史性を踏まえて「炭鉄港」というテーマで、広域的な取り組みを進めています。空知の石炭・鉄鋼・鉄道・港湾。こ



には、札幌国際芸術祭にタイミングを合わせて、空知でも出張と三笠を結ぶインスタレーションを展開しています。三笠の旧住友別荘ホールでは、岡部昌生さんの長大なフロタージュを展示しました。長さ100mにも及ぶコンクリートの神殿みたいな空間は、30t積みの石炭貨車がスッポリと10両入って、上から石炭がドボドボ落ちてくる場所でした。岡部さんの作品は、ものすごいダイナミックな作品ですから、そこら辺の会館ごときじゃ展示出来ない、こういう長さ100mの空間があるところで初めて生きてくる。

自慢じゃないのですが、私はルーブル美術館を15分出てきた男ということでも有名なほどアートとは縁がなかったのですが、空間をもう一度違った視点で構成し直してくれるアートの

れは空知の石炭を軸に、小樽・室蘭を結び取り組みで、少しまた地域の広がりが出てきたかなと思っています。さらに、小樽は北前船と大きな関わりがあるし、室蘭は舞鶴・呉といった海軍港との深い関係がある。同じ鉱山仲間で見れば、世界遺産である石見銀山であったり、播磨の生野銀山であったり、鹿児島島の薩摩藩とも非常に強いつながりを持っています。福島というと、安積疎水なんかもそういう流れの中にある。産業というのは、まさにネットワークですから、そのなかで我々の場所の意味をいかに訴えかけていくのかということを考えています。

最後になりますが、一つ頼りにしているのが、パラダイムの転換です。かつて二宮金次郎の銅像が全国各地の小学校にあって、これは勤勉の象徴で目指すべき存在だったわけですが、しかし、今やなんて言われるかというと、「元祖歩きスマホ」ですから。こんなのまねしちゃいけないっていう存在になっている訳です。

だから、同じものであっても、時代の流れによって見方とか捉え方っていうのは変わってくる。今、この時代の大きな変化っていうのは、まさに我々にとってチャンスだというふうに思いうる。それが頼りにして活動を続けるといふところなんです。

小林

ありがとうございました。吉岡さんからご講演いただきました。北海道空知の産炭地の歴史を知ることの大切さ、その土地の歴史を知って、そこから、では今、どうしていったらいいのか。価値観の変換も含めてなんです。目に見えないものをどう共有していったらいいのか。その一つ



の模索としてミュージアムはあるんじゃないかというお話もいただきました。吉岡さん、ありがとうございました。

続きまして、京都府の舞鶴市にあります引揚記念館の山下館長からお話いただきます。こちらは空知の炭鉱に対して、引揚という土地の歴史を、ミュージアムとして地域の方とどのように位置付けて活動していращやるのか、そのお話をお聞きしていきます。山下館長、どうぞよろしくお願いいたします。

舞鶴のまちの歴史

山下

山下です。どうぞ、よろしくお願いいたします。



山下美晴さん

それでは、本日のフォーラムのテーマに沿って、舞鶴からは「紡ぐまちの記憶、次世代への継承から次世代による継承へ」ということで、取り組みの一部をご紹介できたらと思います。まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。と思いますが、舞鶴市生まれ舞鶴市育ちでございます。引揚記念館の館長になってからは9年目を迎えております。

京都はみなさんよくご存じだと思うんですが、舞鶴は京都府の中にございます。京都市から北上して、日本海に突き当たったところ。京都市内から1時間半ぐらいのところにあります。福島からは約7時間かかるとおうかがいしております。今回その7時間を体感しようと思つてたんですけど、直接伺いできなくて大変残念に思っております。

舞鶴のまちの歴史なんですけれども、明治34年、1901年に海軍の鎮守府が置かれております。先ほども、吉岡館長のお話にもありましたが、横須賀・呉・佐世保、そして最後に舞鶴に海軍が置かれまして、明治・大正・昭和と海軍のまちになりました。その明治の時代に武器庫として使われた赤れんが倉庫をはじめ、いくつかそういう資産がございます。4市で平成28年に日本遺産の認定も頂戴しております。

その後、昭和20年以降は引揚港としての役割を担ったというまちの歴史を有しております。引き揚げの港ということですが、昭和20年、第二次世界大戦終結のとき、日本を離れ海外にいらつした日本人の方は約660万人と言われております。そういう方々の帰国を受け入れる港は増えたり、減ったりですけれども、だいたい、延べ18港ぐらいあったと言われております。舞鶴はそのうちの一つなんですけれど、二

この地で残していきたい

そして、戦後40年に、舞鶴にお帰りになった方々が引き揚げを振り返る記念式典のためにもう一度舞鶴にお越しになったときに、第二の出発の地、第一步を記したこの舞鶴で、戦後40年の移りゆく記憶を、ぜひこの地で残していきたいんだという熱い思いをまちに届けていただきました。そして子どもたちに平和って、命って、どうして大切かということ伝えていってほしいんだというお気持ちの中から、昭和63（1988）年に引揚記念館が開館をいたしました。

全国からたくさんさんの収蔵品をいただいております。今年33年目ですけれども、当初は2400点、いまは1万6000点に増えております。極寒の中を耐え忍んだ防寒着、衣類ですとか、あちらで書かれた数少ない記録資料ですとか。そして、このジオラマのなかで当時の引揚の様子を再現したり、シベリア抑留の生活を経験、体感していただく、そういった空間もつくっております。

活躍の歴史

舞鶴市民の当時のお迎えの取り組みについては、実は以前の引揚記念館ではほとんど展示は

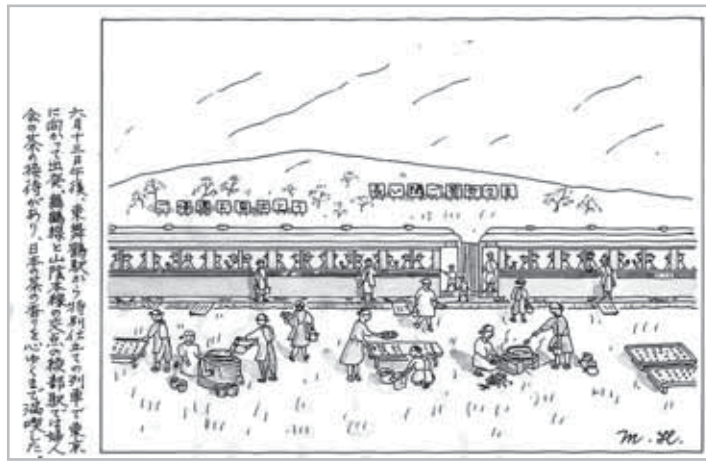
つ特徴がありました。一つは昭和20年から33年までの13年間で引揚事業の期間なんです。舞鶴だけがその13年間、全期間を引揚港として担ったということ。ちなみに昭和33年と言ったら東京タワーが建った年なんですけれども、そのときまで自分の意志で祖国に帰れなかった方々がいらつしたんですね。二つ目は、舞鶴には各方面からお帰りになつたんですけれども、シベリア抑留、戦後強制的に運行されて、労働等をさせられた、そういう体験をした方々が、ほとんど帰って来られた港だという特徴がございます。

「お帰りなさい、ご苦労さまでした」

もちろん引き揚げは国の事業として行われましてけれども、13年間、舞鶴のまちや市民も深くその事業に関わらせていただいております。



引揚者をお迎えする中で、大きな引揚船で帰って来られたときに、各漁村から船を出したり婦人会が足を運んで「お帰りなさい、ご苦労さまでした」という声をかけたことが、引揚者にとって本当にどんなにうれしかったかということなことを言われ、今も舞鶴に気持ちを寄せていただいております。あちらで亡くなった方のお骨が一番最初に日本に下り立つのが舞鶴なんですけれども、船にお迎えに行つて先頭を歩いたのは、当時の舞鶴の女子中学生。いまでは考えられませんが、当時はそういったことも舞鶴の子どもたちが担っていました。これは、すごくかわいい絵のようにも見えますが、シベリア抑留を経験された方の抑留体験のなかの



しておりませんでした。帰つてこられた方々に温かくするのは人として当然なところもありまして、まちとしては、「私たちは本当にすごい活動をした」みたいな、そういった展示はなかなかしにくいところもありました。9年前に沖縄出身の学芸員が縁があつて引揚記念館の学芸員となつたんですが、その学芸員が、これはすごいことなんだと、当時あの状況の中で、引揚港としてこういった行動をしたということ自体、歴史であつて、伝えなければいけないことだし、子どもたちにもまちの歴史として伝えるべきではないかということ。5年前のリニューアルのときにこうした、活躍の歴史を伝えるコーナーを設置しました。

世界記憶遺産

開館当時、シベリア抑留体験者の方の平均年齢60歳ぐらいで、10万人足らずのこの町に、20万人を超える方が来てくださいました。けれども、平成も20年ころになると来館者も右肩下がりになってきました。それは体験者の高齢化という現象も大きいと思うんですが、舞鶴の人たちの中で、戦争とか暗いイメージはもういいという、そういうふうな関心の薄れというの、来館者減少に現れた一つではないかと思っております。

9年前に館長に就任した時、過去最低の入館者数から再生をするというのでスタートをしたんですが、その中で取り組んだ一つとして、ユネスコの世界記憶遺産というのがあります。富士山とか、富岡の製糸場、あいう自然とか建物の世界遺産は有名ですが、この世界記憶遺産というのは、記録資料、文字ですとか絵

画ですとか、記録された資料を登録するユネスコの遺産事業の一つです。日本ではまだあまりなじみがないんですが、世界では400件を超えて登録をされておりまして、代表的なものとして、アンネ・フランクの日記の原本ですとか、フランスの人権宣言書の原本ですとか、最古のコーランですとか、ベートーベンの楽譜ですとか、そういったものがあります。

日本で私どもがやってみようと思ったときは、まだ福岡県田川市の炭鉱記録画1件しか登録がありませんでした。私もユネスコに登録できるとは全然思っていなくて、でもそういったことを通じて、登録を目指すすゝいものがこの舞鶴にはあるんですよということ、市民のみなさんにもう一度、引揚の歴史や引揚記念館に目を向けていただけたらという想いで始めました。

応援する会

取り組みを始めますと、報道など、いろいろな機会に触れていただくことができるようになります。これは何か、自分たちも一緒に、目標を持ってやれることだということ、市内の40団体の方が応援する会を結成してくださいました。

私どもからお願いをして結成するのでは今までと同じだなと思って、言わずに我慢していただきます。そうしたらある日、言ってきたんです。本当に涙が出るくらいうれしかったんです。一緒にやろうよとおっしゃってください。市民活動としては、自分たちで用紙を作ってください、お知り合いに配ってくださいたり、街頭と一緒に汗をかきながら署名活動をしてくだ



さったり。

そうしますと、はじめは大人の方だけだったんですけれども、学校のみなさんも、自分たちも何かできるかなと、国際コースを持っている高校などは、アメリカやカナダへ行くのに、自分たちで企画をして署名活動をしてくれました。それを私もあとで聞いて大変感激しました。そういうことがございました。

ありがたいことに5年前に世界記憶遺産に登録になりました。入館者数の増加や、PRですとか、いろいろなことが進んだんですけれども、一番の財産は、まちの中に、引揚の歴史を残そうとか、これを伝えようとか、引揚記念館と一緒に応援しようとか、そういった心が残ったということが、本当にありがたいことだったなと思っています。

記憶遺産登録を一過性とせずに、ゴールじゃないんだ、継続して取り組み進めることで、この歴史が未来につながるよねということで、みなさんからの声で、引揚の第一船の入港日10月7日をまず「引揚の日」としようということになって、今3年目ですかね。いろいろと取り組みを進めております。

博物館とつづけること

もう一つ、博物館の役目として、やっぱり教育普及というのがあって思っております。ここ数年でようやく、市内18の小学校に学芸員が行かせていただいて、そのあと館に来ていただいております。体験者の方が舞鶴にも何人かいてくださるので、そのお話ですとか、当時のものに触れるということを見せていただいております。

願っております。ありがとうございます。

小林

ありがとうございます。山下館長からお話しいただきました。引揚の方、それから戦争経験の方たちの想いで、起きたことを伝える場所として建ったミュージアムですけれども、この数年間の活動の中では、市民のみなさん、そしていろんな世代のみなさんにとっての自分ことになって、館を運営していらつしやるといことが、すごくよくわかりました。そうありたいと思いつつ、なかなかできることでもないと思うんです。本当にすごいことを実現されている引揚記念館だと思っています。3世代で担っているミュージアムのお話をお聞かせいただきました。山下さん、ありがとうございます。

それでは3番手の岩名さんから話をおうかがいます。岩名さんは、今、三重県の鳥ヶ原という地区で、同世代のみなさんと一緒に「蜜ノ木」という活動をされています。岩名さんもまた、「自分たちのふるさとの歴史を足場に、そこから文化的な、そして緩やかなつながりの中での活動をしていっしやいます。

これまでNPOや公立のミュージアムといったお立場からお話をお聞きしましたが、今度は民間のみなさんのつながりの中での活動についてお聞きしてみたいです。

では岩名さん、どうぞよろしくお願いいたします。

岩名

岩名です。どうぞよろしくお願い致します。僕は今日の講師の方の中では、一人だけアーティストという立場なので、アーティストの視点か



そうした中で、ありがたいと思うのは、子どもたちが自主的な活動をしてくれるようになったことです。子どもたちが引揚を知識として受け取ってくれるというところから進んで、自分たちで劇にしたり、学校の中に引揚記念館を自分たちで作ろうとか、そういった行動へ移していただいています。学校としては、それを学校の中だけの行事にするのではなく、地域の方を呼んでくださったりと、地域に発信をしてくださるということが、少しずつ、各年代で増えてきました。大変うれしいことだと思います。

博物館としてできることについて、まだまだ私たちは探している途中ではあるんですけれども、歴史を伝えるために一緒に何かやってもらうということ、その拠点となる、核となる、そ



岩名泰岳さん

ら、僕の活動拠点である三重県の鳥ヶ原という場所と、地元の人たちと一緒に活動をしている「蜜ノ木」について、お話しさせていただきますと思います。

旧鳥ヶ原村

まず、僕の今暮らしている鳥ヶ原という場所について、簡単に紹介します。鳥ヶ原は旧鳥ヶ原村と呼ばれていて、京都府、滋賀県、奈良県に接する、三重県の山間集落です。2004年に過疎化の影響で市町村合併があって、それによって消滅して、現在は三重県伊賀市鳥ヶ原という場所になっています。人口は約2000人で、高齢化率は48%になります。

鳥ヶ原の風景をいくつか紹介します。鳥ヶ原



ういった役割なのかなというふうに思っています。

その中で平成28年から語り部の養成講座に中学生が3名来てくれました。学校でいろいろと繰り返し聞いたのが理由だというふうに言っていました。大人の語り部さんと一緒に講座を受けて、活動をしてきています。初めは3名だったんですけれど、語ったり、イベントで活動をしている姿を後輩たちが見て、そういうのがカッコいいなど、ああいうふうに分たちもやってみたいなというふうなことで、今、24人の中学生と高校生が活動をしてくれるようになりました。そしてその子たちが、全国から来られる人たちとの記念館で交流したり、リモートで交流したりが、少しずつですが、芽生えております。

には、JR関西本線という鉄道が通っていて、この鳥ヶ原駅から名古屋方面であるとか、大阪方面、関西方面に、だいたい1時間に1本くらいの電車で出掛けていくことができます。村にはいろんなところに、こういう田園風景が広がっていて、川の上流のほうではサワガニとかの生きものも採れます。今、うちのアトリエでも、このサワガニを飼っています。人口減少が進んでいるんですけど、毎年夏には各地区で盆踊りが行われたり、地域のコミュニティというのは今も残っているわけです。

次に僕の生い立ちと、なぜアートの世界に進むようになったのかについて、お話しさせていただきます。僕は1987年に鳥ヶ原の隣の上野市という場所で生まれましたけど、小学校3年生ぐらいのときに家族で、当時の鳥ヶ原



平和でより良い未来を目指していきたい

今、記念館では、シベリア抑留とか引揚体験者の語り部さん、そしてそういう人たちから講座を受けた大人の語り部、そして中高校生の語り部と、3世代で活動しております。小さな地方のミュージアムですけれども、まちと一緒に、まちなかの人たちと一緒に、そしていろんな方の、市外からの応援もいただきながら、平和でより良い未来を目指していきたいなというふうに、夢を少しずつ進めていこうというふうに思っております。

またどうぞ、引き続き「縁が繋がりますよう

村に移住しました。鳥ヶ原の中学校を卒業した翌年に、先ほどお話しした市町村合併による鳥ヶ原村の消滅を経験しました。

今日のフォーラムでは、「ミュージアムの」なことというテーマが一つありますので、鳥ヶ原の市町村合併による影響の一つで、象徴的なことを一つ取り上げたいと思います。それは村の資料館の閉鎖ということです。旧鳥ヶ原村資料館は、かつて村役場の一室に、鳥ヶ原の歴史資料であるとか農具などが展示されていたんですけど、市町村合併直後の2004年に閉館状態になりました。展示室には村の年表を書いたパネルがあったんですけど、それは2004年以降、更新されていません。村の年表が更新されなくなったということは、いわゆる公的に、自分たちの土地の記憶を記し続けていくというのが困難になっていったことを象徴していると、僕は感じています。

土地の記憶を表現する方法、伝えていく方法

僕は中学2年生ぐらいのとき、2001年ごろだったんですけど、この先、市町村合併によって、鳥ヶ原村がなくなる計画があるということを知って、そのときにすごく大きな衝撃を受けました。ちょうどそのころから芸術に興味を持ち始めて、中学の図書館でマルク・シャガールという画家の画集を見つけたんです。このときに初めて、写真とか映像とは異なる、土地の記憶を表現する方法、伝えていく方法というのに出会いました。それが自分が絵を描き始めていくきっかけになったんですね。そのあと、美術大学に進んで、現在も鳥ヶ原を題材にした



絵画の制作をしています。

これは島ヶ原を題材にした僕の絵画作品の一例です。観音山と呼ばれる、石の観音像が並んでいる山が島ヶ原にあるんですけど、そこを歩きながら、土地の古い信仰や、そこに生きた人たちの記憶に着想を得て描いた油絵の作品が、「観音山」というタイトルの作品です。こういう、自分の育った土地を題材にした絵画作品を作って、各地のギャラリーや美術館などで発表しています。

「蜜ノ木」

成安造形大学という滋賀県の芸術大学を卒業したあと、ドイツのデュッセルドルフ芸術アカデミーという芸術大学に留学しました。その留学中の2011年に、日本で東日本大震災が起きて、原発の事故の問題も含めて、ドイツでも大きく報道されていたんですけど、それが自分のこれからの芸術活動を見つめ直すきっかけに

なって、地元の島ヶ原に戻って活動をしたい、創作をしたいということを考えてたりとか、絵は一人で描いているんですけど、自分だけで作品を作るんじゃなくて、地元の人たちと一緒に芸術活動しようという計画をこのころ立て始めました。

それで2012年に島ヶ原に帰郷して、地元で作品の制作を始めて、その翌年の2013年に地元仲間たちと「蜜ノ木」というグループを立ち上げました。島ヶ原に暮らす20代の若い人たちを中心に結成したんですけど、関わってくれている人たちというのは、べつにアーティストとか学芸員とか、そういう人たちがじゃなくて、農業をやっている人とか、地元の温泉で働いている人であるとか、大学生とか、実家でぶらぶらしている人とか、そういう、結構幅広い、村に住んでいる若い人たちが集まってきてくれたんですね。それでやがて、いろんな活動をしていく中で、移住者の人であるとか、あるいは県外に住んでいるんだけど「蜜ノ木」に参加してくれる人たちも加わるようになってきた。

こういう活動のなかで、メンバーや活動の形態を変化さ



せながら、島ヶ原という土地に根ざした活動をしています。これまでの主な活動は、展覧会の企画、地域のリサーチ、伝統行事への参加、地域間交流、農業などです。

これは僕がデザインした「蜜ノ木」のロゴです。蜜ノ木の「蜜」というのは木の樹液の蜜をモチーフにしています。

「蜜ノ木」が誕生した背景について、少し説明させていただこうと思います。その一つが、2010年代に島ヶ原、その周辺地域の農村についてです。2010年代に、伊賀市の中心部は、伊賀忍者とかお聞きになった方もいらっしゃると思うんですけど、忍者を軸にした観光地化がどんどん進んでいきました。それによって中心部は観光地化が進んでいくんですけど、観光資源の乏しい、島ヶ原のような周辺地域というのは、さらに取り残されていったんです。2017年には伊賀市は忍者市宣言というのをしています。

移住してきた人たち

一方で取り残された周辺地域はどうなっていたかというと、東日本大震災の直後ぐらいから、若い世代の移住者やUターン者が増え始めて、これまで、僕の子どものころには全然なかったようなお店であるとか、地域おこしをするような団体、イベントなどが次々と誕生していったんです。

こういう状況のなかで、島ヶ原で暮らしていた、例えば僕の同級生とか、その近い世代の若い人たちも、2010年代に移住してきているいろんな活動をしている人たちが、あるいはローカルなビジネスを田舎でやっている人たちに刺激を受けて、「蜜ノ木」が誕生する一因になったと、僕は考えています。

「蜜ノ木」に参加してくれていた村の子たちに、最近、話を聞いたんですけど、やっぱり過疎化していく中で、村を守っていききたいっていう使命感があったりとか、地元では仕事がないってよく言われていたんですけど、移住してきた人たちはネットとかを使っているいろんな仕事とか活動をして活躍しているのを見て、それに憧れを感じたりとか、あるいは対抗意識を持ったとか、そういういろんな想いがあったみたいです。

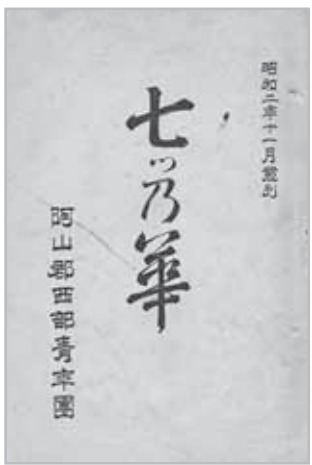
かつての村の青年団

次にもう一つ、「蜜ノ木」が影響を受けたのは、かつての村の青年団の活動の存在です。島ヶ原村にも島ヶ原村青年団というのはあったんですけど、これは合併前後の2000年代に解散し

ています。僕も「蜜ノ木」のメンバーたちも、村の公式な青年団というのには入ったことがないんですけど、「蜜ノ木」が活動していく中で、それよりももっと古い、僕たちが全く知らなかった時代の村の青年団の活動というのを、少しずつ発見していくことになります。

これが戦前と終戦直後の島ヶ原村青年団の文化活動の資料です。「蜜ノ木」の活動の中で発見して、村の方々にいただいたものなんですけど、1927年に島ヶ原村の青年団と、その周辺の村の青年団が共同で発行した、「七ツ乃華」という青年団文集です。この「七ツ乃華」というタイトルは、七つの村の青年団が一緒に作ったことに由来します。直接の関係は不明なんですけど、ちょうどこの本ができる数年前には、関東大震災が起きていて、文集の中からも、当時の島ヶ原やその周辺の地域の村が抱えていた農村の困窮であったりとか、あるいは格差の問題、都市へ人々が流出していくという問題を、村に残っている20代の人たちが、結構生々しく綴っています。

こちらは島ヶ原村青年団が終戦直後に「やぐざ踊り」という演劇というか、寸劇をやっていたときの写真です。1945年の終戦直後というのは、全国的に各地の農村とかで、青年団に



よるこういう「やぐざ踊り」というのが流行していたらしいんですけど、島ヶ原村でもこういう活動が行われていたというのを、「蜜ノ木」で地域のことをリサーチしていくうえで知りました。

僕らが知っている村の青年団は、お祭りの舞台をやったりとか、小学校のキャンプの指導をしたりとか、どちらかというと体育会系のイメージだったんですけど、例えば震災であるとか戦争という危機の時代にあとに、地元の村の若い人たちが、こういう文化的な活動を、限られた時間ではあったんですけど、やっていたというのを、初めて僕も知りました。

村の郵便配達員

もう一つ、「蜜ノ木」の活動に影響を与えたのは、村はずれにある「アトリエ河口 絵好住（エコノミークラス）」という、なすびの絵が描かれた小屋です。その小屋はですね、ドイツから帰国して、島ヶ原でアトリエを探しているときに発見しました。村の人たちにいろいろお話を聞いてみると、昔、村の郵便配達員で、アマチュア画家だった河口重雄さんという人が、自分の手で建てたアトリエだったらしいんです

ね。河口さんはアトリエが完成した直後ぐらいにお亡くなりになって、約10年間くらい空き家になっていました。

それで僕はここを使いたいなと思って、ご遺族の方にお願ひして貸していただいたんですね。廃墟になっていたので、アトリエの片づけであるとか、草刈りとか、そういう改裝作業を始めたんですけど、そこに、島ヶ原に住んでいる地元の友だちとか、近くの村に移住してきた友だちとかが手伝いに来てくれるようになって、その集まりが「蜜ノ木」というグループができていく土台にもなりました。このアトリエは改裝を終えて、そのあと、アトリエ、展覧会場として利用しています。

このアトリエを建てた河口さんという人は、生前、アトリエを芸術を通じた村の人たちの交流の場所にしようと思っていたらしくて、それもこの河口さんのご遺族とかにお話を聞いている中で知ったことなんですけど、この河口さんという村の郵便配達員さんの持っていた理想というのを「蜜ノ木」も引き継いでいることになりました。

このアトリエ河口の清掃をして、2013年にこの場所で「郵便夫（ポストマン）と森の星」という展覧会を「蜜ノ木」で企画します。これが「蜜ノ木」が開いた最初の展覧会なんですけど、村の人たちから、このアトリエを建てた河口さんの遺作をお借りしてきて、彼が生前、どういう人だったかというアーカイブも作って展示しました。あと、そのころ僕のアトリエとしても使っていましたので、僕の新作と、河口さんの作品と一緒に展示しました。会期中には県外の研究者を招いて、地域の芸術に関するトークも開催しています。





観音提寺正月堂

その次に、「蜜ノ木」の活動の場所となっていくのが、観音提寺正月堂という村に古くからあるお寺です。751年に奈良の東大寺の実忠和尚により開創されたと伝わっています。本堂や楼門、本尊は国指定の重要文化財になっています。そして、ご本尊の十一面観世音像は、33年に一度開帳される観音像で、ほかには、毎年2月の修正会という伝統儀式が、このお寺で執り行われています。

この33年に一度開帳されるといわれている観音像なんですけど、2015年に「開帳の年を迎えまして、そこで「蜜ノ木」もこのお寺に協力して、この「開帳のフライヤー」を制作したり、SNSを使って広報活動を行いました。普段は

参拝に来られる方もほとんどいらっしゃらないんですけど、この「開帳のあった1週間は全国各地から本当にたくさんの方が鳥ヶ原に来てくださって、参拝してくださいました。」

そしてこの「開帳の期間、境内にある客殿という建物で「茶の会」という「蜜ノ木」の展覧会を企画しました。これは正月堂にまつわる鳥ヶ原の過去や現在、あるいは次の「開帳」が3年後なので、土地の未来についてのリサーチを行って、その成果として作品や資料を展示しました。会期中には、この場所で県外のアーティストや研究者も交えたシンポジウムであったり、ライブを開催しました。当時、大学生だった「蜜ノ木」のメンバーが、将来の自分たちが住む土地について、どういう土地にしていきたい



いか話し合ったりもしました。

そしてこれが修正会という、正月堂で行われている儀式です。1200年以上続くといわれている、毎年2月になると、「講」と呼ばれる住民グループによって、練りこみが行われています。今は七つぐらい講があるんですけど、その各講がつくった鬼頭（おにがしら）や大餅（だいひょう）などの供物が、正月堂に奉納されます。この写真の鬼とか、男の人たちが抱えているお餅、これらの供物はこの年に鳥ヶ原で採れた野菜や餅米、そういう農作物を素材として作っている。非常にアニミズム的なお祭りです。

この正月堂の修正会に「蜜ノ木」も参加することになって、2015年に「蜜ノ木講」という新しい講が立ち上がります。伝統的な講というのは、参加できるのは決められた家の人で、昔は女性とか子どもはこのお祭りに参加できな

は1953年に鳥ヶ原で発生した山津波を経験した地元の住民の人たちともトークを開催しています。

リアルタイムなことも、土地の記憶の一つとして

コロナ禍では、全国に緊急事態宣言が発令された4月から解除されるまでのあいだ、「蜜ノ木」メンバーが定期的に鳥ヶ原を歩き、お堂や祠を参拝する「歩く日」というのを続けただんです。この活動は、同年、三重県立美術館で開催された「ステイミュージアム」という展覧会でも紹介されました。古い土地の記憶だけではなく

くて、現在起こっていること、現在、土地で起きているリアルタイムなことも、土地の記憶の一つとして活動しています。

失われたり衰退した共同体の機能を緩やかなかたちで

最後になりましたが、今お話ししてきたことを少しまとめてみたいと思います。2010年代に起きた過疎地の文化的な変化は、「ここには何もない」「ここでは何も生み出せない」と思っていた鳥ヶ原の若者たちにも勇気を与えて、「蜜ノ木」の誕生に繋がりました。「蜜ノ木」は土地の記憶や現在の過疎地の課題と向き合っていく中で、失われたり衰退した共同体の機能を緩やかなかたちで担っています。

一つは郷土史研究家的な役割、地域リサーチ、アーカイブの保存です。もう一つは公的な役割。先ほどの正月堂修正会の継承。もう一つは、アートコレクティブ的な役割。これは創作や展覧会についてです。もう一つが青年団的な役割で、これは地域間の交流や教育、地域づくりに関わっています。

これらがすべて成功して、持続しているわけではなくて、人口減少や過疎化が進む中で、土地にはたくさん課題があって、やはり田舎暮らしの現実や、人手不足の問題などは「蜜ノ木」も抱えています。近年は、村の人たちが運営する団体から、村内外の協力者と結びつくネットワークへと、徐々に変化しています。

駆け足になりましたが、僕からの発表は以上となります。ご清聴、どうもありがとうございました。

かったんですけど、だんだん少子化の影響で解散する講も出てきて、近年はより時代に合わせた形の講というか、お祭りにしていこうという動きが強くなっています。「蜜ノ木講」は特に若い人たちが中心なので、よりその傾向が強くて、参加者の約半数くらいは村外から参加してくれる人たちですね。あと、2018年には初の女性の頭屋が誕生しました。そのほか、お祭りで奉納される伝統的なお供え物をみんなで勉強して作っているんですけど、その伝統的なお供え物のほかにも、独自の旗やプラカードなどを制作しています。

いくつかの拠点



岩名さん、ありがとうございます。過疎が引き起こした自分のふるさとへの喪失感が原点となつての活動の変遷と、現在、どんなことを行っているのかお聞きしました。

シャガールの画集を見てというお話が印象に残っているんですけども、そういう図書室だったり、図書館だったり、資料館だったり、閉鎖してしまつたときに、そういうことに出会う、自分の進む道を決めるきっかけをくれる場所がなくなっていくってしまふんだなということも改めて感じて、その共同体の機能を抱えているという「蜜ノ木」の活動に希望を見いだせるような気がしながら、お話をお聞きしてきました。そして、アートの力もですかね。

それではこれで前半を終えることができそうです。みなさん、それぞれにとでも考えさせてくださるご報告、ご講演だったと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・

小林

それでは後半は、前半のお話を受けてまして、ディスカッションをしていきたいと思っています。ライフミュージアムネットワーク事務局で当館の川延副館長がモデレーターをさせていただきます。前半をお聞きになったうえでのご質問を会場のみなさんから質問シートでいただいています。

川延安直

こんにちは。深い質問をみなさんからいただいておりますので、うまく繋いでいくのが難しいですが、まず私からの感想というか、今日こ

このような活動を続けていく中で、「蜜ノ木」は近年、いくつかの拠点を増やしてきました。「Iwana Mitsunoki Studio」というスタジオは2016年にオープンしたんですけど、ここはかつて、村の人たちが働いていた縫製工場だったんですね。そこをリノベーションして、現在は僕と妻のアトリエ兼自宅として利用しています。今日も僕はこの部屋からオンラインで参加させていただいております。

2018年には、この「Iwana Mitsunoki Studio」の近くにある、旧三重銀行跡という銀行の跡地を利用したスペースもオープンしました。ここは展覧会場であるとか、さっきの修正会のお祭りの宴会会場として利用しています。

この「Iwana Mitsunoki Studio」と旧三重銀行跡の2会場を使って、2018年に「くずれる家」という展覧会を開催しました。この展覧会は、伊賀地方での近代絵画の動きであるとか、先ほども少し紹介した青年団の文芸活動、現在の「蜜ノ木」や伊賀ゆかりのアーティストの作品を展示した展覧会です。この展覧会の特徴としては、最初に挙げた伊賀地方の絵画グループの歴史について、「蜜ノ木」だけではなくて、近隣の美術館の学芸員さんたちと一緒に共同でリサーチを行ったというのが一つ挙げられます。

「蜜ノ木」の拠点以外での活動として、2014年に鳥ヶ原会館で開催した「こうさいのさざめき」という展覧会がありまして、これは岩手県の山田町で震災ボランティアを経験した「蜜ノ木」のメンバーが企画した展覧会です。被災された方たちから集めてきた言葉に、「蜜ノ木」のメンバーたちが絵を添えて作った作品を、この公民館で展示しました。この会期中に





川延安直さん

お気付きかと思いますが、これは、いずれも現在福島が置かれている状況だと私は思っています。こうしたお話をこのタイミングでみなさまからお聞きできたことが、まず大変うれしいです。

さまざまな質問をいただいています。まず吉岡さんということですが、これは山下館長にも、岩名さんにも共通する「質問とお聞きいただければと思います」。

「地域の歴史資源の価値を知らないということについて、観光と災害では少し異なるかもしれませんが、過去を思い出したくない、つらい、消してしまいたいといった点から、いわゆる震災遺構の多くが解体撤去されてしまいました。そうした問題について、吉岡さんは、東北の災害遺構や伝承をどのように見られますか」という「質問です。まず、吉岡さん、いかがでしょう」。

そついった日常を示しながら、ある程度時間の助けも借りながら

吉岡

はい。我々、活動を開始したのは1990年代後半なんですけど、タイミングとしては、ある程度の落ち着きを取り戻すまで、そのぐらいまで待たなければならなかったのだというのが実感です。

こちらでも炭鉱事故とか、労働争議など、さまざまな軋轢や悲しみ等がたくさんあって、炭鉱の記憶を残すというのはなかなか理解をしてもらえないところがありました。そういったものが解決されないかぎり、何も先へ進んではいけないみたいな論調、例えば戦争中の強制徴用が解決しないかぎり扱うみたいな、そういう

ところがあつたのです。

それも、何もなかったらどうなるかと問いかけました。何もしなければ人の記憶から全然なくなってしまう。それぞれの価値観の違いはあると思うけど、そこに存在したという出来事はしっかりとみんなで認識をしておく取り組みをしようじゃないかという、最初はそういう言い方をしていました。

ただ、やっぱり時間軸というか、すごく悲しい思い出に対しては浄化作用みたいなものは必要なんだというのは思いました。しかし一方で、時間がたてばたつほど記憶が薄れるし、ものはなくなるしということで、そのとのせめぎ合いです。

そういった直接的な、悲しい思いをしている人に対するケアというものは、当然必要なんですけれど、我々の地域で言われていた「炭鉱の暗い過去を払拭する」というのは、まったく手触り感のないイメージで言っているところがある。炭鉱は「暗い」と言っているけど、住んでいた人間からは「案外すくいいところだったよね」という話がよく出てきます。

ただ、まったく炭鉱と関わりのない人たちから見ると、炭鉱といえば事故ではない。マスコミは、事故と争議と閉山のときしか来ませんから、みんなが泣きわめいている姿がテレビに流れません。だけど、365日泣きわめいていたら、人間、おかしくなっちゃいます。365日のうちの1日は、そういうことかもしれないけれど、残りの364日は、ものすごいひたむきな創意工夫に満ちた、人間らしい生活がある。そういうところをもう一度クローズアップして、過去へのノスタルジーじゃなくて、未来の日本にとってどういう意味があるのかと

いうことに関連つけてゆく必要があります。

私は、大学の教員をしていたのですけれども、目の前にいる友達とラインで会話するような学生が出てくる。ちよつと何か言われたら、ちよつとつまづいたら、もう立ち上がれないような学生がいる。困難なんて日常茶飯事で、いくらでもそういうのを乗り越えてきたダイナミックな人たちを見ながら育ってきた私としては、このような学生の姿は異様です。

先ほどの博物館模擬坑道の坑内火災でも、火災が起きてる最中から、どうやって再建しようという発想がすぐ生まれました。これを、どうやって乗り越えていくかということを考え始めている。昨今の失速してしまうような世の中で、視点を前に向けていくという、そういう逞しさという点で、まだまだみなさんにとっても役立つのかなと。

そういった日常を示しながら、ある程度時間の助けも借りながらやっていくと、少しずつ、一緒に道を歩いていけるような人が増えてくるということでしょうか。

川延

ありがとうございます、吉岡さん。それ相應の時間がかかるということは、私たちもとてもリアルに感じます。

質問の後半は、災害遺構や伝承を吉岡さんはどのように見られますかということですが。

サルベージする時期

吉岡

三笠には、1960年に建設された高さ50mの立坑槽が残っています。地下750mへ降り

るためのエレベーターの槽で、わずか12年しか稼働せず、もう50年近くそのままになって残っています。これを街の人は、「こんなものは恥ずかしい、早く解体すべきだ」と言っていました。しかし、外から来た人は「すごい」と言います。特に若い人が「やべえ」と言っんですね。何が「やばい」のかよくわからないけど。やっぱり、全然、見方が違うということを、少しずつ理解してもらおうということだと思っています。

ただ、災害に実際に遭った人たちにとっては、思い出したくないというのでも、理解できるところです。そこで、今のうちは、とにかく保存、現状だけ維持していく。活用を無理にしようとしなくて、記憶だの、証言だの、写真だの、いろいろなものをサルベージする時期だと思っています。整理してそれを発信したり、意味付けをするのは、もう少し時間がかかるのかなと。

だけど、今やっておかないと、全部薄れてしまいますから。空知でも、おびただしいものをなくしてきましたから。今あれが残っていたらこういうことができたのに、と思うことが多々あります。それでは、今残っている遺産はどうしたのかというと、あまりに巨大すぎて壊したくても壊せなかったものなのです。それは、結果として残ったということで、我々はラッキーでした。震災遺構も、今のフェーズは、できるだけ保存的に取り組んでいく。その過程で、ある程度時間をかけて、それを束ねて発信していく、そういう長期的な戦略というか、作戦が必要だと思っています。

私には、実は東日本大震災も炭鉱遺産も、まったく同じように見えています。津波とか、原発は、何十分とか何時間とか何日間という単位で、



地域が根こそぎ全部なくなってしまう。原爆なんかは、一瞬でなくなっちゃいます。空知産炭地域は、30年間かかりましたが、全てなくなっってしまったということでは同じ本質を持つものだと考えています。

共通するのは、天災ではなく、いずれも人災だということです。空知は、まさに長い間、真綿で首を絞めるような人災でなくなっていました。だから、福島ほどのなくなったことに対する直接的な痛みというのはマイルドでした。福島のような直接的な生々しい記憶に対しては、時間との折り合いということになるのでしょう。

川延

とりあえず、捨てるな、壊すなということ、よくわかります。サルベージというお言葉もとてもリアルに感じます。ありがとうございます。

さて、今、吉岡さんからお答えいただいたようなことも踏まえて、岩名さん、山下館長に引き継いでお話しただきたいと思います。山下館長からでもよろしいでしょうか。お願いします。

記憶を一つに集めることができる

山下

昨年の秋、福島県内の学校の先生が、修学旅行の候補地として舞鶴引揚記念館をお選びくださって、下見にいらしてました。お話しをさせていただいたときに、10年がたつて、福島の子どもたち、震災後にお生まれになった子どもたち、そして当時まだ小さくて当時の記憶がない

子どもたちが、年代的には増えてきて、どう伝えていくかということを考えていると教えていただいたのが、すごく印象的だったんです。もちろん、復興はやってこられていて、これからも復興にも取り組まれる。そして、それと一緒に継承ということも取り組んでいかなければならないんだと思っております。

私どもは、歴史をお伝える館ですけれども、歴史は必ず風化を致します。ミュージアムとして、一番の役割というか、お役に立てることという、やはりいろいろな記憶を一つに集めることができるということなのかなと。戦後75年がたちますけれども、いまだに私どもの館には、年100点とかの資料、また証言が集まっています。なかなか予算的にもたくさんというわけにはいかないんですけれども、私どもは体験者のところに全国行かせていただいて、そのお話をビデオに収めさせていただいて、アーカイブに努めています。

復興というよりも、私どもは継承ですけれども、継承というのは近道がありませんので、一つ一つ遺していくべきものを、とりあえずは集めてきたり、遺したり、繋いだりをして、いろいろな研究者や、いろいろな機会が必要なきに拠点として、それを見ていただいたり、一緒に取り組んだり、そういうことができるのが強みでもあるのかなというふうに思います。一つ一つの記憶を紡げるというか、それをいかに次にパトンとして渡せるかということ、仕組みとして考えてみるということも大事だなと思いが、日々しております。

ちよっと、お答えになっているかどうかかわかりませんが、以上です。

吉岡

今の話に関連して、継承というと、過去のことを未来に対してまったく同じかたちで残さなきゃならないみたいな、そんなようなイメージでとらえられちゃうかなと。継承には、まず今自分たちが立っている土台がなんなんだと、今の時点でちゃんと確認していきましようっていうのがすごく大事です。これは、基礎工事の地盤みたいなもの。そこをちゃんとやっておかないと、いくらいいことをやって、基礎がずぶずぶで、それはいつか朽ちて倒れてしまうものだというのは、空知でやってきたことがまさにそうだった。整地工事をして、1500億円もかけていろいろなものを作ったけど全部倒れた。

だから、継承の前に大事なものは、今、なぜ自分たちがここにいるのかというのをしっかり聞く。50年も100年も同じことを繋げていけるという話ではなく、それをちゃんと認識したうえで、今、何をするかということを考えていくのが、我々の地域。強いて言えば、30年後に自分たちの子どもとか孫に、「親父が変なことをやってくれたおかげで」と言われるのか、「親父たちが残してくれたおかげでなんとかなってる」と言われるのかっていう、その違いがあるんじゃないかと、岩名さんの話を聞いて思いました。

川延

ありがとうございます。もう一つ、岩名さんに質問ですが、「行政からは「蜜ノ木」への支援があるんでしょうか」というお尋ねです。

川延

ありがとうございます。継承の方法について、ちゃんと工夫しないといけないというアドバイスだったと思っています。また、のちほど、子どもたちの伝承事業について、もう少しお話うかがえればと思っていますので、その際は、よろしく願います。

山下

ありがとうございます。

川延

それでは、岩名さん。今のご質問に続けてお答えいただけたらと思います。岩名さんのお話にもあったのですが、今、人口が20000人、高齢化率48%。これは、だいたいこの辺りで言うと、奥会津の金山町と昭和村の間くらいです。そういう規模感、雰囲気ガリアルにわかります。今日、会場にいらしているみなさんも、岩名さんの暮らしているところの状況というのは、なんとなく雰囲気ガ伝わっていると思いますので、仲間にお話しただくようなつもりで、先ほどの質問を受けていただければと思います。

岩名

はい。記憶の風化とか、継承の問題というのが、一つ出てきたと思います。先ほど、お話ししたように、うちの周囲は資料館も閉鎖されて、村の教育委員会もなくなっているんで、記憶の継承とか、そういうのに向き合っていくというのはかなり困難な状態がずっと続いています。

荒地地の中から

何かを酌み取ってくれる

僕は今日、ここでお話しさせていただいてる立場なので、結構微妙なんですけど「蜜ノ木」に参加している村の人たちというのは、必ずしも土地の歴史とか、そういうものを守っていくことに興味を持っているわけではないんです。若い人たちに土地の歴史を継承してほしいというのをよく言われているんですけど、高齢化率が48%となると、もう若い人の数がそもそも少ないわけです。地域のミッション、土地の伝統を継承するとか、記憶を継承するというのは、僕は必要だと思ってそれを仕事としてやっているんですけど、それぞれ生活も大変なので、すべての若い人たちが受け入れられることではないというのもあるんです。その人たちの人生とか、その人たちの時間というものを、土地の継承とか、土地の問題に拘束してしまっているかという問題があります。

ただ、例えば、先ほど資料を紹介させていただいたような、青年団の文集であるとか、アマチュア画家の方が建てたアトリエであるとか、あれって、全然、継承はされずに放置されていたものです。特に、青年団の資料は、90年間ご家族以外、知っている人もいらっしやらない。それが何かのタイミングで、先ほど吉岡さんのお話を借りるとサルベージされる。何か、そういうきっかけというのが発生して、またなんかのかたちで保存、継承されていく。そのままではないかもしれないけれど、そういうことというのは自分の活動を振り返ってみると大きいので、あまり未来に継承するということを要求しすぎずに、もしかししたら救世的な人が、あるタイミングで何十年かに一人現われて、そういう人たちが荒地地の中から何かを酌み取って



「から何ができるのか」

岩名

そうですね、「蜜ノ木」は行政の補助金をもらってやってるっていうことはほぼないです、基本的に。それは、合併であるとか、町の中心部の観光地化がかなり進んでいった結果、こういう過疎地が取り残されていったって、じゃあ、その何も残っていない場所、そこに生きている人は一から何ができるのかとか、あるいは自分たちのDIY的なことでできるのかっていうのは、たぶん「蜜ノ木」の原動力の一つだと思っているので。

これは僕個人の意見ですけど、行政からの補助金とか、いわゆる地域活性化のプログラムに乗るのではない方向の地域の掘り起こし方であるとか、あるいはさっきの廃墟を活用した拠点づくりからの発信とかっていうのは心がけています、現在の段階では。

川延

別の方からですが、今の質問の裏表みたいな質問がもう一つありまして、「地域外の協力者の方たちとの関わりにおいて、現在何か課題に感じていることはありますか。」

バランスの葛藤

岩名

そうですね、課題としては、僕自身もこの村で育ったんですけど、途中から移住してきた人間ではあるので、よそ者といえばよそ者なんです。だから、ずっと村に根を張っている同じ土地の仲間たちと一緒に活動していく中で、地域

外の人にコミュニティをオープンにしているいろんな人たちと協力していくのか、あるいは地元に住んでいる人たちのアイデンティティを大切に活動していくのか、バランスの葛藤というのはやっぱりあります。

地域外には専門家の方もいるので、そういう方がどんどん入ってきて、いいクオリティにイベントができるのは、僕としてはうれしいんですけど。じゃあ、地元で暮らしている人たちが、そこに前向きな気持ちで参加できるかという、いろいろな課題がそこから浮上してきます。

川延

それは、デリケートな問題です。最終的に、お一人お一人のキャラクターをどれだけ大事にできるかということにしかないかもしれない。

あと10分ほどになってしまいましたが、山下館長へのご質問です。今の岩名さんへのご質問のように、地域外の方との関係性みたいなことでもあるので、そういう視点も含めてお聞きいただけたらと思います。「引揚の方たちで、やっぱり一番苦勞されたのは満州からの方たちではないかと。その満州の方たちの多くは、半島の葫芦島（コロ島）から、博多や福岡、佐世保に上陸されました。そこでも同じように、舞鶴の方たちがなさったような、引揚の方たちを大切にする活動があったのではないのでしょうか。そちらにもご連絡なさってみてはどうでしょうか」というご意見です。

山下

ありがとうございます。私ども、平成28年から、引揚港18港のうち、毎年1港ずつ引揚港の



あったまちと連携して、その地で巡回展をさせていただいております。

平成28年に始まって、今、10港ほど、福岡、佐世保、呉、横須賀、函館、和歌山県の田辺、名古屋などへ行かせていただいています。いまおっしゃったように、それぞれの港でそれぞれの役割があったり、それぞれの状況があったりということ、そういったことを一つ一つ勉強しながら、地元と共催で巡回展をして、私どもも資料を持っていったり、地元に残っている資料を出していただいたりということで、少しずつ回らせていただいております。そういうことも、続けたいと思っております。

引揚という記憶が 舞鶴を外に開いている

川延

言い方は良くないかもしれませんが、引揚という記憶が舞鶴を外に開いているということも言えるのかと思います。その辺り、意識的に活用といいますか、方向性を考えていらっしやるということはあります。

山下

そうですね。確かに、引揚の歴史は先ほども言いましたように、市民の方の中には少し重く感じられていたこともあるんですけども、これを通じて、本当にこの9年、いろいろな方と繋がって、こうして福島とも繋がらせていただいているというのは、今までにないことです。記憶遺産に登録されたり、子どもたちの取り組みを発信したりという中で、全国の博物館のみなさんとか、引揚港のみなさん、それから、記



憶遺産を通じて海外の博物館ですとか、研究者のみなさんですとかと繋がることでできているというのは、この引揚港の歴史を伝えて発信していく中でできたことですので、それはうちとしても大変ありがたいですし、そこが、周囲のみなさんも応援してくださる理由の一つなのかなというふうに思っています。

先ほどもありましたけれども、継承とはそのまま残していく、保存していくことは違う。いかに過去から学んだり、過去を聞き遺していくことで次の時代に繋げるかということ、そこを、やっぱり大事にしていきたいと思っています。

川延

ありがとうございます。あつという間です

けど、また吉岡さんと岩名さんから一言ずつ頂戴して、閉会にしたいと思います。語り残してしまったこと、お二人へのご質問でもかまいません。

結果的に土地の記憶というものの 出会っていきけるようになった

岩名

今日、「ミュージアム的」というテーマをいただいたんですけど、「蜜ノ木」を作ったときに、始めから土地の記憶を継承しようとか、拠点を作っていかうとか、すべて決めていたわけではなくて、なんとなく、その集落に残っている若い人たちとグループを作って集まっていこうとした中で、結果的に土地の記憶というものに出会っていきけるようになったと思うんです。

例えば郵便配達員のおじさんが、村はずれに芸術を通して場所を作ろうと思っていたとか、戦前に村の青年団が本気で村を救おうとして、近くの青年団とネットワークを作っていたこととか、そういうものに出会っていったときに、土地の記憶のいわゆる断片みたいなものが残っていたり、あるいはそこに生きた人の理想、精神というものが残っていたと思うんです。なんか、そういうものが、逆に「蜜ノ木」を作ったのかなということ、僕は感じます。

だから、箱物があつてその土地の記憶を扱うんじゃないくて、その土地の記憶の断片みたいなものが地面の奥とか空気に漂流していて、それを残された人たちが拘って吸収していくことによって、それが一つの何か、箱ではない、流動的なものを作ったのかなということ、僕は自分の活動、あるいは島ヶ原での出来事について

思い起こしました。

川延

岩名さんは、出会ってしまったと、さらりと語られるけれど、それが実はすごく大変なことのはずです。出会ってしまう引きの強さ。やっぱりご自分でアーティストだなという感じはあります。

岩名

そうですね。たぶん、合併のことに関しても、必ずしも村のみなさんが、それに対してすごい喪失感を感じたとか、そうではないと思うんです。過疎化が徐々にこうやって進んでいくから空き家がでるのは当たり前だし、資料館がなくなっていくのも自然なことだったと思うっている人たちも結構いらっしやると思うんです。

僕は、芸術をあえて外で勉強して、地元に戻ってきた人間なんで、これまでの経験の中で違う視点、たまたま近所の人と話したらそういう廃墟があるとか、昔あそこの家のおじいちゃんがかういうことやってたとかっていうのを聞くと、それにどんどん吸い込まれていって。それで、結果的に、いくつかのものを村の外に発信できるまでになったと思うんです。それは仕事としてやっているというよりは、普段の暮らしのなかでたまたまそういうものに、出会っていったものだと思うんです。

「何もない」について

川延

岩名さんと吉岡さん、お二人のレジュメに共通して出てきているフレーズがあります。「な

んにもないってみんなが言う。うちの村には何もない。」そこを、何もなくてはないと気付けるみなさんに、今日はお話しいただいたと思います。最後に、その「何もない」について、吉岡さん、お願いいたします。

吉岡

今日、私自身、舞鶴と、それから岩名さんのところと、こういうかたちでミックスできたというのは、非常に幸せでした。ありがとうございます。特に舞鶴は、わが家も樺太からの引揚げ者なので、個人的にもすごい親近感があります。今度、ぜひ行きます。岩名さんのところにも行きたいと思いますので、よろしくお願いします。

永遠の北極星を追い求める

岩名さんとすごく同じ意見だったのは、岩名さんが、「蜜ノ木」の活動内容を、郷土史の研究会であり、コーディネートであり、といういろおっしゃっていただけど、自分たちを何と規定するかというところで、やっていくうちに逆に規定される局面がでてくる。やっぱり実践集団、岩名さんのところは。やっていくと必ず道は開ける。どうやって、見つかるんですかと川延さんは言っていましたけど、正直やっていれば見つかるんです。

ただ、これは自転車と言う後輪みたいなものなんで、推進力にはなるんだけど、前輪のハンドルが変な方向に行ってしまうと、いくらこいでもこいでも思いどおりにいかない。やっぱり、前輪に相当するものが要です。

我々の活動は、要は地域のシンクタンクだと

規定しています。どっちの方向へ持っていくから良いだろうと迷った時に、遠い将来こういうふうになりたいねというのを持ちながら、ずっと永遠の北極星を追いかけるというか、こういう方向だよという方向性を示していく。そこで、やっぱり内容をしっかりと保っていくために学びが必要なことなんだなと。

しかし、地域の中だけで完結していると、腐っていったり、固まっていたりするので。外の力というの、すごく必要になる。

ミュージアムが これからやっていくべきこと

そういうときに、ミュージアムというのはすごく良い装置で、外の人と中の人を、うまく結んでいく。あるいは、外にある制度を使って、自分たちの地域を見直す企画をつくれる。山下さんのところの記憶遺産もそうだし、我々の日本遺産もそう。それによって初めて地域の人たちが、ある結び付きを力にしながら、学び合うという意味では、すごくいいかなと。

視点を変化させたり、発見をするという、そういう新陳代謝とか、外からの力が必要で、これはミュージアムがこれからやっていくべきこと。保存、収集、展示しているだけではない。外に対しても、朝日のように外に光っていて、それをテコにまた外の力を引き込んでという、なんか呼吸をするような、換気口みたいな役割、そんなような存在であるべきなんだなと思いが、自分自身もミュージアムの館長としてやっていっています。

さらに言うと、あともう一つは、やっぱり人なんです。インタープリターなのか、ファシ



リテーターなのか、マネージャーなのか、そのどれともつかないような、センスがあつて、外の目も知っていて、中のことも知っている。そのときどきによって、足元をやればいいのか、外に目を向ければいいのか、進むのが大事なのか、止まるのが大事なのか。まさに、一瞬一瞬で風向きが変化してきますから、そういうのをうまくバランスを取ってやっていける存在がそこに加わると、ミュージアムというような仕組みに、地域の歴史というのを接続しながら、いいことできないかなと、そんな思いでやっています。

壮大な失敗例である空知は、そういう意味では、みなさんに学んでいただけることがたくさんありますので、ぜひ現地でお待ちしております。ありがとうございます。

川延

どうも、ありがとうございます。あつという間に時間になってしまいました。

最初、お話ししようと思っていたことも、いくつかあったんですけど。今日は、とても良い質問を、会場からたくさんいただきました。で、そちらをベースにやらせていただきました。また、ぜひ次はリアルでお会いしたいと思います。今日は、どうもありがとうございます。

小林

ありがとうございます。はい。本当に時間があつという間で、もうちょっと聞きしたいぐらいで、またの機会を考えていければと思います。

今日のタイトル「地の記憶を苗床に」。空知、島ヶ原、舞鶴それぞれが、とても豊かで強い苗床なんだろうなと思ってこの企画に臨んだんですけど、お話をお聞きしていて、日本各地にこういう場所があることで、そしてそれぞれの地域が点ではなく面的に繋がることで、日本全体が強い苗床になっていたらいいなとも思いました。

私たちは日本各地に先輩がいることをとても頼もしく思いながら、福島も苗床を強くしていければと思います。そのため場所に、こちらの博物館も、そして各所のミュージアムもなれるとうれしいなとも思っています。

それでは、本当にみなさん、ご参加くださいまして、ありがとうございます。

大きな学びになりました。持ち帰りたいと思います。(20代)

今まで、福島を深掘りする話を聞く機会が多かったので、北海道、京都、三重と知らない土地のことを学び興味を持ちました。参加する回を重ねるごとに、ミュージアムはいいなあと思います。(50代)

3人の方のお話はどれも興味深く、面白いものでした。地域の魅力を新たな視点で見つけ出し、そして発信し、継続するという形は、とても参考になります。

「ミュージアムが苗床に、内と外をつなぐ」「すでに起きた未来」「とにかく現場に来てもらう」「土地の記憶を伝える表現」など、日常生活ではなかなか出会えない言葉です。

自分が住む会津という地域をアートを通してもっと面白くしたいと思っているので、これからも取り組みに注目しています。(60代)

空知の吉岡氏のお話は、福島県とも多く共通すると思った。

新しく何かを作っていくのではなく、地域に残っている記憶や歴史から育てていくことは非常に大切である上に、有用なものであると感じます。

そんな資源をどのように発掘して伝えていけばいいのか、考えていきたいです。(20代)

「記憶」という言葉がとてもいいなと思いました。

私も地域の文化や民具などを調査する活動をして、どうしても残していけるんだろうという気がします。

「記録」だけではだめですね。人の思いも合わさっての「記憶」を残すべきということを、お話を聞いて感じました。(20代)

各地の活動とその特色が理解できた。これを福島県にどう活かせるかが課題。(60代)

それぞれの地域の現状により、どのように活動するかは同じではないということを、再度考えさせられました。

自分たちだけの思い、考えだけではことは成らないが、行動しなければ進まないということもよくわかりました。

行動する方法はいくらでもあるのだということを学ばせていただきました。(60代)

吉岡さんの炭鉱のお話を聞き、その地域での現状への抗い方をかっこよく感じました。建造物を残し、向き合うことが大切だと考えさせられました。

学生時代京都で過ごしたのですが、

山下さんのお話で舞鶴にそのような歴史があることを初めて知り、大変勉強になりました。(20代)

炭鉱事故や廃坑、引揚の負の歴史、合併で周辺化した過疎高齢化地域の三様の地の記憶に、どのように向き合ってきたのかがわかり、

福島の課題と重ね合わせてお話を聞くことができた。

保存して遺すだけでなく、どう伝承するか、その苗床からどう育て実を採っていくか、今後の福島での取り組みに大いに参考になるお話だった。

とくに、島ヶ原の岩名さんのお話は興味深かった。アートを通じて表現することや、かつての青年団活動の重要性に気づかされました。

青年団活動の歴史や意義など、学び直してみたいと思いました。(50代)

行ったことがない土地や、気になっていた土地の貴重なお話がきけてよかったです。自分の今住んでいる土地とも改めて向き合い、考え続けたいです。(30代)

参加者の声